

リーディング・リテラシーと読書態度との関係

中野友香子*

佐藤誠子**

深谷優子***

近年、文脈を超えてテキストの読み書きに関わる能力を包括するリーディング・リテラシーという概念が提唱されている。しかし、依然として国語教育で扱う読解と教科外で行われる読書とは区別して捉えられている。そこで、本研究ではリーディング・リテラシーと、小説を読むときの読書態度との関係を検討した。大学生71名を対象に、読解問題と読書態度尺度への回答を求めた。読解問題の正答数およびIRTモデルで算出した尺度値と、読書態度尺度の得点を用いて相関分析を行った。その結果、「読書熱中」がリーディング・リテラシーと正の相関関係にあることが示された。さらに、近年注目されている無答率の高さについて検討した結果、小説を読むときの「共感重視」が関係することが明らかとなった。本研究の結果は読書時の態度の個人差とリーディング・リテラシーとの関係性を示しており、近年盛んに行われている読書推進活動のリーディング・リテラシーの育成へ有効性を保障するものである。

キーワード：リーディング・リテラシー、読書、読書態度

問題と目的

近年、活字による情報収集および発信の機会の増加に伴い、教育場面に限らないテキストを理解し活用する力であるリーディング・リテラシーが重視されている。OECD（経済協力開発機構）によるPISA（Programme for International Student Assessment）では、リーディング・リテラシー（読解力）を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」としている（文部科学省、2010）。すなわち、テキストを読んで理解し情報を取り出す「読む」力と、それらを活用して意見を述べる「書く」力を包括する広い概念であるといえる。

また、リーディング・リテラシーは多様なテキストに関する能力を把握するものと想定されている。OECD-PISAの扱うテキストには、図表や統計データなどを含むような非連続型テキストだけ

*教育学研究科 博士課程後期

**石巻専修大学人間学部 助教

***教育学研究科 准教授

でなく、連続型テキストとして物語 (Narration)、解説 (Exposition)、記述 (Description)、議論 (Argumentation)、指示 (Instruction)、文書または記録 (Documents and records)、ハイパーテキスト (Hypertext) など多様なテキストが含まれる (OECD, 2013)。このように、リーディング・リテラシーはテキストの種類を超えた読み書きの能力、すなわち、テキストに関する読解力を包括的に把握する、広義の意味での読解力といえる。

ただし、テキストの読みに関して日本では、国語教育で扱われる読解と教科外で行われる読書とを区別する見方が踏襲されているという (柴山・佐藤・熊谷・足立・中野, 2012)。たしかに、読書は、読む材料や主題などが教師により決定される国語教育とは異なり、日常生活の中ではほぼ自発的に行われるものであり、読む本のジャンルや頻度などは個々人の裁量に任される部分が多い。したがって、中野・佐藤・深谷 (2014) で示されたように読書経験には個人差があり、その量的側面は人によって異なることは納得できる。

また、趣味として読書を挙げる者が多いことからわかるように、読書は娯楽としての意味合いが強いとも考えられる。読書行為は、テキストから情報を取り出す過程で生じる情動によって支えられている (秋田, 1991)。テキストから情報を得るために読書を行うこともあると考えられるが、推理小説で謎が解けていく楽しさや自伝で共感して感動することを求めて読書を行う者も多いだろう。特に小説などに関しては、「面白い」「感動する」などの情動喚起を期待して読書を行うことに主眼を置くために、国語教育での目標の一つとされる「情報を正確に取り出す」ことは必ずしも求められない中で読書行為を行うことも可能である。以上のような観点から考えると、日常生活での娯楽として行われる読書と、国語教育の中でのテキストから正確に情報を得ることを目的として行われる読解とは読みの捉え方やプロセスが乖離することも考えられる。

とはいえ、OECD-PISA の定義に従うと、リーディング・リテラシーは先述したようにテキストに関する「読み」や「書き」能力を包括する概念である。このことを踏まえれば、例えば自発的な読書経験がテキストの読解にも影響を及ぼしたり、あるいは、情報を正確に取り出す読解が十分にできているからこそ、読書で期待される情動喚起がもたらされるなど、両者は必ずしも乖離したものではなく相互に関係性があることが予想される。

そこで、本研究では、テキストの読みの実態をより包括的に捉えることを目的とし、読書と読解の関係性を検討する。具体的には、リーディング・リテラシーの問題への回答を求めることに加え、読書活動の一側面としてどのように読書を捉えているかに焦点を当てて、小説を読むときの読書態度への回答を求め、両者の関係を検討していくこととする。読書に対する態度に関して、中野・佐藤・深谷 (2014) は読書嗜好性尺度を開発している。そこで、読書全般への態度を読書嗜好性としている中野他 (2014) を参考に、本研究で検討する小説の読みに関わるような質問項目を用い、リーディング・リテラシーとの関係を検討する。

ICT (Information and Communication Technology) の進展に伴い情報が溢れる現代において、テキストの種類に依存しないリーディング・リテラシーの視点を持ち、その育成を行うことはテキストを用いた情報収集および処理を迅速かつ正確に行っていくためにも非常に重要である。まずは

読書活動とリーディング・リテラシーとの関係を調べることを通じて、テキストの読みに関する実態を明らかにし、リーディング・リテラシーの育成に貢献できる知見を提供することが期待できよう。

さらに、リーディング・リテラシーのうち「書く」ことについても示唆を得るために、探索的な検討を行うこととする。足立(2012)によると、2009年に行われたPISA調査より、我が国の読解力の特徴としてリーディング・リテラシーのなかでも文章に書かれている情報と既有知識や価値観といった文章外部の知識と統合する側面が弱いことが明らかにされた。この無答率の問題について読書との関係性が指摘されていることから(柴山他, 2012)、本研究では記述問題の回答と読書態度との関係についても探索的に検討を行う。

方 法

協力者 私立大生83名中欠測のない71名を分析対象とした。

材料 以下の尺度で構成される質問紙を作成した。

①読書態度

中野他(2014)の「1読書回避」「2読書熱中」「3意外性受容」「4共感重視」「5思索専念」という尺度構成および項目を参考に、各尺度の内容に対応する5項目ずつを選別して使用した。「1読書回避」は「現実味に欠ける設定の話は、読みたくない」など読書への回避的な態度で構成される尺度である。「2読書熱中」は「何度も読み返すほど、好きな話がある」など夢中になるほど読書に取り組んだり、読書に熱中したりした経験で構成される。「3意外性受容」は「意外な展開になるのが、おもしろい」など展開の意外性や伏線を確認しそれらを回収することへの嗜好性で構成される。「4共感重視」は「自分にも起こりうるような話が好きだ」など自分自身が登場人物やストーリーに共感できることを嗜好する態度で構成される。「5思索専念」は「自分で予想しながら読むのが好きだ」などのストーリーや先の展開、行間や伏線を考えながら読むことへの嗜好性で構成される。本研究では小説の読みに関する態度を測定することを目的とするため、中野他(2014)の因子分析の過程で除外した項目も一部使用して各尺度を構成した。実際の使用項目はAppendixに記載している。各項目について、小説を読むときにどの程度当てはまるかを「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の6件法で回答を求めた。

②リーディング・リテラシー問題(以下、RL問題)

柴山他(2012)の尺度を用いた。この尺度は、OECD-PISA調査と国語科の中学校学習指導要領を視野に入れた独自の基準に基づき、テキストに関わる「読み」「書き」の能力を測定する目的で作成されたものである。そのうちの多枝選択式問題12問および記述問題1問を使用した。多枝選択式問題は大問4つ(K05, K06, K07, K04)を使用しており、各大問は一つの文章と3つの小問から構成されており、計12問を本研究では使用した。また、記述式問題1問は、多枝選択式問題3問を含む大問(K06)に含まれていた問題を使用した。各設問の詳細については、柴山他(2012)を参照されたい。また所要時間については、柴山他(2012)での対象者と所要時間を参考に、ここでは15分をおおよそ

の所要時間として設定した。

手続き 心理学の講義時間内に一斉に実施した。調査の概要および回答内容が統計的に処理されること、実験への協力が自由であることを説明し、協力できる者のみ回答するよう求めた。調査全体での所要時間は15～30分程度であった。

結果

得点化

①読書態度

各下位尺度についてクロンバックの α 係数を算出した。その結果、「読書熱中」以外の4尺度については各1項目 α 係数を低める項目があった。「読書回避」では「q9小説は、結末が知りたくて、途中を飛ばして読んでしまう」、「意外性受容」では「q3伏線を確認したくなるような話が好きだ」、「共感重視」では「q24読み返して、伏線が張られているのに気づいて感心したことがある」、「思索専念」では「q14いつかは答えがわかるだろうから、あまり気にしない」のそれぞれを除外し、尺度得点を算出した (TABLE1)。

②リーディング・リテラシー成績 (以下、RL 成績)

RL 問題全13問について柴山他 (2012) の基準に従い正誤を判定した。RL 問題の多枝選択式問題12問については正答数 (0-12) を算出した。さらに、IRT モデルにより協力者ごとにパラメータ (尺度値 θ) を算出した。その際の項目パラメータは柴山他 (2012) の値を使用し、推定方法は MLE 法で行った。その結果、正答数は平均8.10、標準偏差は1.76であり、尺度値 θ は平均0.63、標準偏差は1.72であった。

記述式の RL 問題一問については正誤のみを用いて以下の分析を行う。正答者は35名、誤答者は18名、無答者は18名であった。

読書態度と RL 成績の関係

読書態度尺度の基礎統計量と、RL 成績との相関係数を算出した (TABLE1)。読書態度の α 係数は全体的に高いとはいえず、特に「共感重視」は低い値を示していた。

TABLE1 読書態度尺度得点の基礎統計 (1項目当たりの得点) と RL 成績との相関係数

	α	M	SD	r	
				正答数	尺度値 (θ)
1 読書回避	.680	2.75	1.03	-.154	-.127
2 読書熱中	.848	4.01	1.29	.388**	.263*
3 意外性受容	.718	4.91	0.84	-.035	-.072
4 共感重視	.611	3.94	1.06	.037	-.074
5 思索専念	.722	4.03	0.99	.082	.002

* $p < .05$ ** $p < .01$

読書態度尺度については6件法で回答を求めていることから、本データは「読書回避」が低めであり、「意外性受容」が高めであるものの、各尺度の得点に大きな偏りはないものとみなすことができると判断した。

さらに、リーディング・リテラシーとの相関分析の結果より、「読書熱中」のみ有意な相関係数が得られた。RL成績の正答数、尺度値共に有意な正の相関関係にあることが示された。

記述問題の回答パターンと読書態度の関係

RL問題(記述式)1問の回答パターン間での読書態度尺度の得点およびRL成績(正答数・尺度値)を比較した(TABLE2)。その結果、読書態度は「共感重視」でのみ、回答パターン間の得点差が有意差であった($F(2, 68)=3.264, p<.05$)。多重比較を行ったところ、「誤答」と「無答」間および、「誤答」と「正答」間の差が5%水準で有意であった。すなわち、記述問題の無答者および正答者と比べて、誤答者の「共感重視」得点が低いという結果が得られた。また、RL成績については正答数、尺度値ともに有意な結果は得られなかった。

TABLE2 RL問題(記述式)の回答パターンごとの読書態度尺度得点
およびRL成績の基礎統計量($M \pm SD$)

	無答 ($n=18$)	正答 ($n=35$)	誤答 ($n=18$)
1 読書回避	2.82 \pm 0.82	2.63 \pm 1.02	2.93 \pm 1.26
2 読書熱中	3.94 \pm 1.16	4.07 \pm 1.28	3.97 \pm 1.48
3 意外性受容	5.06 \pm 0.80	4.84 \pm 0.90	4.89 \pm 0.79
4 共感重視	4.10 \pm 0.96	4.13 \pm 1.02	3.40 \pm 1.10
5 思索専念	3.86 \pm 0.65	4.15 \pm 1.15	3.96 \pm 0.96
正答数	7.28 \pm 0.54	8.63 \pm 2.12	8.39 \pm 2.62
尺度値(θ)	0.03 \pm 1.30	1.07 \pm 1.85	0.78 \pm 2.02

考 察

まず、本研究では読書にまつわる嗜好を示す読書態度とOECD-PISAの定義に由来するリーディング・リテラシーとの関係について検討した。その結果「読書熱中傾向」という教科外での読書を嗜好する態度がリーディング・リテラシーと関連することが明らかになった。読書に夢中になった経験があり、読書に熱中することを嗜好する者ほど、書かれたテキストから情報を得て活用する力も高いといえる。これはリーディング・リテラシーが、分立的に捉えやすい読書と読解とを包括する概念であることを示唆する結果といえよう。足立(2012)が指摘しているように、日本では教科外で行われる読書と国語科の教科として行われる読解とを区別して考える風潮がある。しかし本結果を踏まえると、国語教育という文脈を超えてテキストを活用する能力同士には関連があるということが導かれる。

ただし、本研究は読書に対する態度の一部とリーディング・リテラシーとの関係を示したに過ぎ

ない。教科外でのテキストと関わる機会の多さという量の要因がリーディング・リテラシーに関わっているのか、それとも、どのように読書をしているのかという質の要因に関わっているのか、今後は更なる検討が必要といえる。読書量や読書で好む本のジャンルについても、例えば、深谷(2008)や中野他(2014)の研究を参考に調査を行っていくことが求められよう。さらに、読書態度を測定する尺度についても全体的に α 係数が低いという問題も指摘できる。これは各下位尺度が4項目と少ない項目で構成されていることを反映している可能性がある。また、本研究では中野他(2014)の作成した尺度を参考に目的に合うように項目を取り出して使用しており、信頼性について十分に検討された構成になっているとは言い難い。読書経験や読書への態度や嗜好性について尺度をさらに精緻化し、どのようにテキストを読むかという質的な側面に踏み込んだ研究を行っていくことが今後の課題である。

また、本研究では、近年問題視されている無答率についても探索的に検討を行った。その結果、記述問題の回答パターンによるRL成績の有意差は認められなかった。この理由として、リーディング・リテラシー測定に用いた設問の特徴があるといえる。本研究では、読みに特化した多枝選択式問題を用いてRL成績を算出しているため、活字での表現に焦点化した記述式問題の回答に基づくリーディング・リテラシーとは質的に異なっていたと考えられる。一方、回答パターン間の「共感重視」の読書態度の差は有意であった。具体的には、誤答者のみ「共感重視」得点が低いという結果であった。これは、小説を読むときに登場人物やストーリーに共感できることを嗜好する者の場合、記述問題を解く場合に正解できるという自信がある時には回答するものの、正解できる自信がない場合には誤答してもよいから回答するということはせずに、無答で答案を提出する傾向があることを示すものである。この結果は昨今問題視されつつある無答率の高さの背景にある要因に関して示唆を与えるものである。それはつまり、教科外でのテキストに触れる機会と位置付けられる読書への態度や経験の違いが、無答という回答パターンに関係する可能性である。無答で答案を提出する背景にはその問題がわからないという単純な理由ではなく、より一般的な性格や特性などの個人の傾向があることが推察される。ただし、その理由については本結果では明らかにできていないため、本研究で残された課題といえよう。

本研究は、テキストを読んで活用する力には国語教育という文脈を超えて関連性があるということを示すものである。これは、近年盛んに行われている読書推進活動の意義を保証する重要な資料となりうるだろう。OECD-PISAの調査結果より、教科外での読書活動が改善されつつあるとの指摘もあり(文部科学省, 2010)、これらの活動を継続することで更なるリーディング・リテラシーの育成が可能になるかもしれない。国語教育を通じたリーディング・リテラシーの育成を目指した実践については須藤・安永(2011)などの研究がある。これらの研究に読書活動を通じたリーディング・リテラシーの育成方法についての知見を提供することで、より多側面からのアプローチが可能になるだろう。リーディング・リテラシーの実態把握および育成への示唆を得るために、今後は読書と国語教育で行われる読解との関連性について精査していくことが必要である。

【参考文献】

- 足立幸子(2012)リーディング・リテラシーについての展望 全国規模の学力調査における重複テスト分冊法の展開可能性について 平成23年度文部科学省委託研究「学力調査を活用した専門的課題分析に関する調査研究」研究成果報告書, 26-32
- 秋田喜代美(1991)物語の詳しさがおもしろさに及ぼす効果 教育心理学研究, 39, 133-142
- 深谷優子(2008)俳句理解における心情把握と読書経験との関連 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57(1), 167-172
- 文部科学省(2010) OECD 生徒の学習到達度調査 Programme for International Student Assessment ～2009年調査国際結果の要約～ <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/07/1284443_01.pdf> (2015年3月23日)
- 中野友香子・佐藤誠子・深谷優子(2014) 読書嗜好尺度の開発 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 62(2), 73-83.
- OECD (2013) PISA 2012 Assessment and Analytical Framework: Mathematics, Reading, Science, Problem Solving And Financial Literacy, OECD Publishing.
- 柴山直・佐藤喜一・熊谷龍一・足立幸子・中野友香子(2012) 平成二十三年度文部科学省委託研究「全国的な学力調査における重複テスト分冊法の展開可能性」研究成果報告書 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/085/shiryo/attach/1323273.htm> (2015年3月26日)
- 須藤文・安永悟(2011) 読解リテラシーを育成する LTD 話し合い学習法の実践－小学校5年生国語科への適用－ 教育心理学研究, 59, 474-487

Appendix 読書態度尺度

	番号	項目
1 読書回避	q2	現実味に欠ける設定の話は、読みたくない
	q7	自分が感情移入できる登場人物がいないと、つまらない
	q8	実生活に役立つものではないものは、読みたくない
	q9	小説は、結末が知りたくて、途中を飛ばして読んでしまう
	q16	主人公に共感できない話は、読みたくない
2 読書熱中	q4	話が長い小説は、読みたくない
	q5	何度も読み返すほど、好きな話がある
	q11	読むのに時間がかかる話は、読みたくない
	q13	繰り返し読んでもおもしろい小説はある
	q25	小説を一気に集中して読むほど熱中したことがある
3 意外性受容	q1	意外な展開になるのが、おもしろい
	q3	伏線を確認したくなるような話が好きだ
	q12	読んでいて、結末が想像できない話が好きだ
	q17	先が読めそうで読めない話は、おもしろい
	q20	予想と違う展開になると、うれしくなる
4 共感重視	q6	自分にも起こりうるような話が好きだ
	q10	自分と共通点のある登場人物のいる話が好きだ
	q15	試練を乗り越える話が好きだ
	q19	泣ける話を読みたい
	q24	読み返して、伏線が張られているのに気づいて感心したことがある
5 思索専念	q14	いつかは答えがわかるだろうから、あまり気にしない
	q18	自分で予想しながら読むのが好きだ
	q21	自分でいろいろ考えながら読むのが好きだ
	q22	読んでいて、頭を使う話が好きだ
	q23	現代社会の問題を扱っている話を読みたい

Relationship between Reading Literacy and Perceived Reading Preference

Yukako NAKANO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Seiko SATO

(Assistant Professor, Faculty of Human Studies, Ishinomaki Senshu University)

Yuko FUKAYA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The present study examined relationship between Reading Literacy and perceived preference of reading a novel. Seventy-one undergraduate students responded to a reading comprehension test and a perceived reading preference scales. The number of correct answers and the person parameter computed with the IRT modeling were used for measuring a Reading Literacy. Through the correlation analysis, “Sense of Immersion” shows a positive relationship with Reading Literacy. Moreover, we considered a relation between an answer pattern to a description item and the perceived reading preference scales. Result shows that “Orientation Emotional Involvement” relate to no answer. Those findings suggest that a promotion of reading activities have an impact on improving students' Reading Literacies.

Key Words : Reading Literacy, Reading, Perceived Reading Preference

